（第3種郵便物認可）　中日新聞　2011年（平成23年）5月1日（日曜日）　☆ 28

備える

その100「続・震災報道」

東日本大震災を取材して

星野大輔

心の傷 忘れない

三週間後、東北の被災地に入った。私は一九九五年の阪神大震災でも現地取材の経験があるが、当時と今回では、被災地の雰囲気は全く異なっていた。阪神の発生三週間後。神戸の避難所や公園では炊き出しの湯気が漂う中で、子どもの声が響き、ボランティアが忙しく働いていた。「早く復興せねば」の空気を感じた。

だが今回、被災したがれきの街には人の気配が感じられなかった。見かけるのは捜索の自衛隊員や警察官ばかり。阪神が街を「壊した」災害とすれば、今回の震災は住民も含めて「根こそぎなくした」という感じだ。阪神で発生一カ月で二人だった行方不明者が今回は一万人以上いる。

多くの避難所には「マスコミ立ち入り禁止」の紙が張り出され、カメラを持っているだけで冷たい視線を感じた。ただある程度親しくなると「この状況を全国に伝えて」という訴えがほとばしり出た。不運を嘆く男性、文句をまくし立てる若者、笑みと涙が入り交じる女性…。共通するのは取り残されたくないという思いだった。

子どもたちの笑顔にはすさんだ気持ちを和らげる力がある。しかしその裏の心の傷を忘れてはならない。宮城県登米市の避難所で、絵本を読む園児を撮影しようと名前を聞いた時のこと。「なまえは、たかはしあらた。おうちは、つなみでながされちゃった」。男の子は一気に答えるとカーテンの陰に隠れた。返す言葉が見つからなかった。一緒に絵本を読み、遊び、三十分かけてようやくシャッターを切った。

被害と不安が大きすぎて「前向き」どころではないのが被災者の気持ちだと思う。取材者も被災者の目線を持ち続けてこの大災害を記録していかねばと思う。（写真部）

震災発生から1カ月、大勢の児童が津波に流された大川小学校には花を手に訪れる保護者の姿が絶えなかった＝4月11日、宮城県石巻市で（星野大輔撮影）

前回に引き続き、東日本大震災の被災地に第二陣、第三陣で入った記者たちの息遣いを紹介したい。被災地も被災住民も、時間とともにさまざまなことが微妙に変化していく。記者はそれを敏感に受け止めた。

被災者と歩調合わせて

戸川祐馬

初めて執筆中に涙

被災地に入ったのは二週間後だった。直後に派遣された記者とは違う。現地の空気も変わっているだろう。何を書いたらいいのか。出発まで考え続けて、行き着いたのは、やはり「人の生き死に」を書くということだった。

取材はしにくくなっていた。ある避難所では被災直後には記者が入れた子どもの遊び部屋はマスコミの立ち入りが禁止されていた。簡単な話は聞けてもいざ記事にするために詳しく取材しようとすると何度も拒否された。家族を亡くした人や行方が分からない人と会い、何とか取材を始められても、被災者が直面する現実を突きつけられ、苦しくなった。執筆中に涙が出たのは初めてだった。

「読者はもう悲しい話を読みたくないのではないか」。そんな声が一部の記者の間にあるのは知っていた。テレビが被災地の明るい話題を流しているのを見ると、悲しい話はもういいかなと思うことも正直あった。それでも気づくと悲しみを追いかけていた。「この惨状や悲しみを語るには、人の死をもってするしかない」。いつの間にか確信めいたものがあった。

岩手県大槌町は、私が取材に入った五日間で、電柱が立ち、スーパーが仮設店舗で営業を始めた。朝晩には車の渋滞も起きた。しかし他方でがれきの撤去が進まず、遺体の捜索さえできない町民の声を聞くと、「復興」と書くのはためらわれた。記憶から震災を消さないために書き続けたい。（松阪支局）

浅井俊典

「想定外」ではすまぬ

あの津波が三陸海岸の街を襲うまで、だいたい三十分あった。三十分あれば逃げられるんじゃないか。現地に来るまで、そう思っていた。

岩手県陸前高田市の女性(六)が住む地区では、指定された高台の避難所まで歩いて七、八分かかる。しかしそれは健康な大人の足でであって、八十代の女性ならその何倍もかかりそうだった。

歩いて逃げたら間に合わない。離れて暮らす長男はそう考え、女性を車で高台に送り届けた。さらに別の家族を助けに行き、津波にのまれた。同じように、親や子どもを助けようとして犠牲になった話を何人も聞いた。

地元の災害史研究家は「それを美談ですませるな」と言った。津波が来たら親や子どもに構わず身一つで逃げろという「津波てんでんこ」の教訓がこの地方にあるように、非情に徹しなければ津波からは生き抜けない。

しかし、死を覚悟する状況でも、ほとんどが肉親や周りの人を助けようとしていた。下校中の子どもを迎えに行き、子どもの目の前で流された岩手県宮古市の母親もいた。

今回の津波を、想定外だったと嘆く行政関係者をあちこちで見た。だが高齢者が指定の避難所に逃げるのに予想の何倍もの時間を要することや、その高齢者を助けに行き、犠牲になった人の行動も「想定外」なのか。二万五千人以上の死者・行方不明者を出す被害の大きさに立ちすくみそうになるが「想定外」のくくりですませてはならない問題もある。（社会部）

梅田歳晴

東電擁護の声 驚き

原発事故から約一カ月後の四月中旬、福島県大熊町の役場機能移転先で、約三千四百人以上の住民が身を寄せる同県会津若松市に入った。

「今までの恩恵を、そっくりそのまま利子付きで返されているみたいだ」。大熊町で美容院を経営していた男性(六)の言葉が耳に残った。男性の自宅は原発のすぐ近くにある。

原発賛成か反対か。原発震災取材にかかわった記者の一人として、原発に対してどうというスタンスであるべきなのかも問われている。私の中でまだ答えは出ていないが、原発近くの住民たちの視点も忘れられないと思った。（大津支局）

失業状態で市内のホテルで妻と避難生活を送っている。

取材した相手に共通する願いは「早く町に帰りたい」。だが、現在も進行中の原発事故は、収束見通しも不透明なままだ。「どれくらいかかるのでしょうか」。取材した主婦からの問いかけに、まともな言葉を返せなかった。帰る家があるのに帰れない。原発事故の特殊な事情に翻弄される住民たち。その避難先もまぎれもなく「被災地」だった。

一方、避難を余儀なくされているのに、東京電力を擁護する声も同時にあったのには驚いた。原発で働く作業員は「正直、廃炉にはしてほしくない」「東電さんがいたから仕事ができたんだ」と。原発とかかわりがあって恩恵を受けてきた人とそうでない人の間では当然、事故後のエネルギー政策の在り方や電力会社への見方が異なる。

太田鉄弥

本当の取材 これから

被災地へ入ったのは四月一日から九日まで。食料や衣類など最低限の物資が行き渡り、住民は避難所生活に慣れ始めたころ。直後のパニック状態が収まり、失ったものの大きさを実感する時期でもある。約三百人が暮らす岩手県大槌町の安渡小学校への密着から取材を始めた。

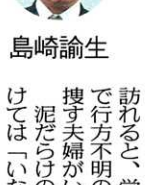
行方不明の夫と義父を捜す一方で震災後初めてはさみを握り、住民の髪を切った理容師、自衛隊が持ち込んだアルバムの束から家族の写真を見つけて号泣する女性。ドラマが次々と起きた。我慢強い東北の人たちは、お天道様の下では弱音は口にしない。夜に校庭でたき火を囲み、時には焼酎を手に本音を拾った。

「おれたちのことを忘れないでくれよ」とたびたび言われた。被災から一カ月もたたず、見下ろす町は廃虚のままなのに、早くも忘れられる不安を感じているのは意外だった。

確かに避難所の一隅にあるテレビは、通常の番組編成に戻っていた。ニュースは「仮設住宅の入居受け付けが始まった」と遠くの被災地の動きを伝える。安渡では建設予定地さえ決まっていなかった。

格差は避難所内にもある。家族が無事な人、職場が津波に流された人、車が残った人、すべてをなくした人…。雪に震えて、みんなが等しくピンポン球より小さなにぎり飯を食べた極限状態は過去のことだった。ある男性は「今は仲間といるからいい。将来、仮設住宅で自分だけが残ったら…」と悲観した。

「死ぬのは地獄。生き残っても地獄だよ」と語った人たちが今後どのように生活を取り戻し、あるいは取り残されてしまうのか。本当の震災取材はまだ始まったばかりなのだ。（社会部）



島崎諭生

伝え残すことに意味

被災地に入ったのは間もなく一カ月という時期。犠牲者の家族の中には、痛ましい記憶に触れたがらず、マスコミの接触を拒む人も多い。そうした心情への配慮と、伝えるべき情報の間で、自問自答しながらの取材が続いた。

震災一カ月の節目に取材した宮城県石巻市立大川小学校。児童の七割にあたる七十四人が、学校から高台に避難する途中で津波にのまれ死亡・行方不明になった。前日に学校を訪れると、学校の裏手で行方不明のわが子を捜す夫婦がいた。

泥だらけの材木をどけては「いないか…」とため息をつく妻。思い詰めた表情で一心不乱に捜す姿に、掛ける言葉が見つからない。別の記者がカメラを地面に置き、がれきを取り除き始めた。私も手袋を出し自然に後に続いた。三十分ほど手伝いを続けたが、結局話は聞けなかった。

少し離れた場所では生き残った教師らが同じように児童を捜していた。取材を申し込むと、思い詰めた表情の校長から「どういう趣旨で取材するのか」と質問された。「ここで起きた事実を伝えることは、再び同じ悲しみを繰り返さないために大切なことです」。思いを込めて伝えると、校長はぽつりぽつりと、引率の教師らが倒木を恐れて学校すぐの裏山に児童を避難させなかったことなどを説明してくれた。

震災一カ月の当日の地震発生時刻。報道陣は学校に追悼に訪れた家族らの要望に応じ、離れた場所から後ろ姿を撮影するだけにとどめた。

取材でいたずらに家族の心情を乱すことは避けたい。それでも悲しみや津波に襲われた状況を伝え残すことは、地震列島に住む私たちにとって意味あることだと信じている。（社会部）

「備える」毎週月曜日に

本紙は二〇〇二年五月から月一回、本欄を掲載して東海地震に備えてきました。神戸や奥尻島、中越の震災現場を歩き、記録し、検証する作業を通じて、後世の教訓となる紙面づくりを心掛けてきました。

しかし未曽有の被害をもたらした東日本大震災は、地震列島に住む私たちに、あらためて自然への恐れを呼び起こすとともに、新たな課題を突き付け、防災観さえも変えようとしています。

連載百回を機に装いを新たにし、「備える～3・11から～」として五月十六日付紙面から毎週月曜日の朝刊に掲載します。東北の被災状況や被災地の防災機能を多面的な視点で検証し、大胆なシミュレーションも用いて、この地の備えに役立てたいと考えます。

16日から **拡大版スタート**

震災対応の世論調査詳報

（数字は%、カッコ内は前回3月26、27日両日調査）

問1　あなたは菅内閣を支持しますか、支持しませんか。

支持する	26.8(28.3)
支持しない	58.7(55.6)
分からない・無回答	14.5(16.1)

問2　あなたは、どの政党を支持しますか。

民主党	17.4(18.9)
自民党	25.4(20.6)
公明党	4.3(4.1)
共産党	2.0(3.6)
社民党	1.8(0.8)
みんなの党	7.4(8.3)
国民新党	0.3(0.7)
たちあがれ日本	0.3(0.8)
新党日本	0.2(0.1)
新党改革	0.2(0.2)
その他の政党・政治団体	0.7(0.2)
支持政党なし	38.7(39.8)
分からない・無回答	1.3(1.9)

問3　東日本大震災で、あなたは政府の被災者救援や被災地支援についてどのように評価していますか。

大いに評価している	5.0(10.0)
ある程度評価している	41.1(47.9)
あまり評価していない	39.9(31.9)
全く評価していない	12.4(7.3)
分からない・無回答	1.6(2.9)

問4　福島原発事故で、あなたは政府の事故対応についてどのように評価していますか。

大いに評価している	1.8(4.9)
ある程度評価している	25.9(34.4)
あまり評価していない	43.6(38.6)
全く評価していない	27.0(19.6)
分からない・無回答	1.7(2.5)

問5　菅直人首相は東日本大震災の対応や福島原発事故の対策でリーダーシップを発揮していると思いますか。

大いに発揮している	1.3(4.5)
ある程度発揮している	21.0(30.0)
あまり発揮していない	45.7(40.9)
全く発揮していない	30.3(22.8)
分からない・無回答	1.7(1.8)

問6　政府は東日本大震災の復旧、復興のため約4兆円の2011年度第1次補正予算案を国会に提出しました。あなたは補正予算案について評価しますか。

大いに評価している	5.9
ある程度評価している	52.3
あまり評価していない	29.1
全く評価していない	6.3
分からない・無回答	6.4

問7　現行の子ども手当について制度を見直し大震災の復旧、復興の財源に充てるとの考えが与野党にあります。あなたは10月以降の子ども手当の在り方について、どれが最も適当だと思いますか。

子ども手当を廃止し以前の所得制限がある児童手当に戻す	40.0
子ども手当を廃止し所得制限がある児童手当にした上で手当を拡充する	26.3
子ども手当を続けるが、7000円の上積み支給はやめる	22.5
子ども手当を続け7000円の上積みも実施する	5.7
その他	2.0
分からない・無回答	3.5

問8　大震災の復旧、復興の財源に充てるため、消費税率を期間限定で引き上げる考えが政府与党内に浮上しています。一方で所得税、法人税増税で対応すべきとの考えもあります。あなたは、どれが最も適当だと思いますか。

消費税率の引き上げで賄う	19.1
消費税率は変えず所得税、法人税の増税で賄う	27.1
消費税率の引き上げと所得税、法人税増税の組み合わせで賄う	24.0
増税をせず国債増発などの財源で賄う	20.9
その他	3.8
分からない・無回答	5.1

問9　大震災の復旧、復興財源として消費税率を引き上げることが避けられないとすれば、あなたは現在の5%をどのくらいにするのが適当だと思いますか。

6%程度	20.1
8%程度	41.5
10%程度	24.8
15%程度	1.1
その他	7.5
分からない・無回答	5.0

問10　あなたは民主党と自民党の大連立政権になることに賛成ですか、それとも反対ですか。

大連立に賛成	37.3(41.8)
大連立に反対	48.6(45.1)
その他	1.2(2.7)
分からない・無回答	12.9(10.4)

問11　あなたは菅首相がいつまで首相を続けるのがよいと思いますか。

直ちに退陣すべきだ	23.6(13.8)
年内	26.2(28.1)
来年9月の民主党代表の任期切れまで	30.6(34.7)
再来年8月の衆院議員の任期満了まで	10.0(14.5)
その他	3.3(3.0)
分からない・無回答	6.3(5.9)

▽調査の方法＝全国の有権者を対象に29、30両日、コンピューターで無作為に発生させた番号に電話をかけるRDD（ランダム・デジット・ダイヤリング）法で実施した。実際に有権者がいる世帯にかかったのは1444件、うち1010人から回答を得た。東日本大震災の被災地のうち、岩手、宮城、福島の3県で被害の大きかった一部地域は調査対象から除いた。

© 中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています。